

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

小学校における外国語活動展開事例の検討： 授業観察記録を基礎として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 小学校外国語活動, 授業観察, 文字の指導, 事例研究 キーワード (En): 作成者: 仲川, 浩世 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006035

小学校における外国語活動展開事例の検討*

— 授業観察記録を基礎として —

仲 川 浩 世

要 旨

日本の小学校における英語教育への取り組みは2011年に正式に始まったばかりである。アレン玉井(2010)は、児童英語教育の教材の開発は既に発達しているが、理論の構築は遅れていると述べている。その一因として、実際の現場におけるデータ収集が容易ではないためであると考えられる。そこで、筆者は現行の小学校外国語活動の実態を知るため予備調査として、公立小学校と研究開発校の英語村を訪問した。文部科学省の指針にそって、研究開発校以外では、「聞く」「話す」の音声を中心とした学習活動が行われている。しかし近年、先行研究を通じて外国語活動における「文字の指導」の必要性が議論されつつある。また、2013年に文部科学省は、2020年度以降に中学年に外国語活動を導入し、高学年から英語を教科化すると発表した。こうした状況から、本稿は授業観察記録を基礎として、小学校における外国語活動の展開事例を検討しようとした。

キーワード：小学校外国語活動、授業観察、文字の指導、事例研究

1. はじめに

2011年度小学校外国語活動が5、6年生に週1時間、年間35時間正式に必修化された。また2013年には2020年度以降外国語活動を中学年から導入し、高学年から英語を教科化すると文部科学省は発表した。

さらに2014年「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」¹⁾では以下のように記されている。

小学校では、これまでの実践を踏まえながら、中学年から「外国語活動」を開始し、音声に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う。高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」に加え、積極的に「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。そのため、学習の系統性を持たせる観点から、教科として外国語教育を行うことが適当である。

全国の公立学校で小学校外国語活動導入が開始されて以来、文部科学省の方針は改訂されて

いる。各教育現場で実施されている内容論、方法論にもばらつきがあると推測される。このように改訂が重なるため、現場は指導法・教材案に対して常に研究を重ねていかなければならない。それゆえ小学校外国語活動は全国的に注目を集め、勉強会などが頻繁に開催されている。

筆者も小学校外国語活動のプロジェクトチームの一員として、研究活動に数年前から携わってきた。²⁾しかし、実際に小学校の教育現場になじみが薄かったため、本学教職センターを通じて、小学校の授業観察の打診を行ったところ、幸い訪問する機会に恵まれた。³⁾また小学校の英語教育が既に定着している寝屋川市の「英語村」も見学する許可を得た。寝屋川市は約10年前から、研究開発校に指定されている。「英語村」とは寝屋川市の英語教育事業の一環として、寝屋川市教育研修センターで現在実施されている「英語づけ」の学習活動を体験できる場である。

筆者は、「英語の教科化」に向けて今後小学校における英語教育がどうあるべきかを追究しようとしているが、その出発点として、本稿では、小学校現場における外国語活動の実情を把握しようとした。本稿はこのような予備調査で得られた授業観察記録を基礎に、小学校における外国語活動展開事例を検討しようとするものである。まず先行研究について言及する。次に、訪問校と英語村の事例を報告する。最後に授業観察から「気づいた」今後の課題点について考察する。

2. 研究の背景

2011年度から実施された外国語活動の目的は、コミュニケーション力を育成し、国際理解教育を発展させ、英語の音、リズムに慣れさせることである。すなわち教科ではないオーラルコミュニケーション中心の遊び感覚の指導が実施されている。一方、文字の指導に関しては、補助的な役割にとどめるべきであると述べられてきた。⁴⁾

しかし、中学校になれば、外国語活動から英語は必修科目として指導される。「音声中心の楽しい外国語活動」から、「四技能統合型の難易度の高い授業」へと学習内容は変わってしまう。よって、小学校においては文字の指導に対する工夫が必要ではないかと考えられる。

アレン玉井 (2010: 126) はリタラシー教育⁵⁾の重要性について、

「書き言葉」が「話し言葉」とは異なる多くの利益を人間社会にもたらす力を持っているからであると主張している。

松田 (2013: 66-69) は小学校5、6年生と中学1、2年生を対象とした意識調査を実施し、①小学校高学年は文字に興味を示す発達段階にある、②中学生が小学校での文字学習を望んでいたと報告した。

伊東 (2013: 30-31) は、「文字を使つての指導」と「文字指導」の違いを指摘している。「文

字を使つての指導」とは、例えばリンゴの絵の下に apples と書いた絵カードを利用した発音練習などのことである。また「文字指導」はアルファベットの文字の読み書きなどのことを表す。音やチャンツ、歌などの中に文字を取り入れて、そこから自然にローマ字とは異なるアルファベットの読み方を気づかせるというものである。そして、「文字を使つての指導」と「文字指導」についての区別をすべきであると述べている。

さらに、伊東（2013: 36-37）は「文字を使つての指導」の一例として ICT（Information and Communication Technology）と英語絵本の連携を提案している。これは、大人数クラスの場合、機器を利用して英語母語話者の声を聞かせたりすることが可能となるためである。すなわち、音声を中心とした指導の中に「文字を使つての指導」を少しずつ組み込んでいき、自然と文字への興味を喚起するよう展開することが望ましいと述べているのである。

山本（2014: 141-142）は「小・中・高の連携を考えれば、音声面を中心としながらも、文字指導を導入し、わずかでも読めたり書けたりする経験をさせることが望ましく、その経験がのちの英語学習への動機づけにつながると考える」と論じている。山本を代表とするプロジェクトチーム⁶⁾は、2011年から現在まで、ICT を用いた四技能統合型の授業実践の研究を行ってきた。実践内容は、遊び感覚で児童の負担にならないよう、好奇心を満たし、目標を持たせて文字指導を行うことが可能となるよう工夫したものである。具体的な授業内容は主に次の3つの活動から成り立っている。

- ①香港の小学生との文通を通じた国際交流
- ②映画「トイストーリー」を用いた文字の学習
- ③教科書『Hi, Friends! 2』内の「桃太郎」の英語劇の発表

山本（2014: 144-146）は、上記の実践後テキストマイニング⁷⁾によるアンケートの自由記述分析を行った。その結果、「小学生高学年は、文字指導に対して大きな抵抗感を持っていない」、「文字を書くことで英語をよく覚えられる」という結果を導きだした。

これを基にして、プロジェクトチームは英語教材 LINE アプリの開発研究に取り組み、2014年7月には、パイロットスタディを行った。これは iPod 上の LINE アプリを用いて、児童の英語の四技能、特にリタラシー能力を高める学習活動である。アプリはまだ実験段階である。しかし、パイロットスタディ後のアンケートで、全員が「楽しかった」と回答した。少人数でもあり、英語教師2名、情報専門の教師2名と数人の大学生ボランティアが、目の行き届いた指導をしたことも要因であろうと予想される。児童のほとんどが学校以外で英語を勉強したことがないにもかかわらず、発音練習や、iPod へのスペル入力に興味を示していた。

(表1) LINEを使った授業実践

<p>《単語練習バージョン》</p> <ol style="list-style-type: none">① 対象を iPod で写真撮影する② 先生に写真を見せて「Tell me!」と聞く③ 先生が正しい発音を教える④ 生徒は発音を練習する⑤ 生徒がボイスメッセージ機能を用いて発音を録音する⑥ 先生にボイスメッセージを聞かせてスペルを聞く⑦ スペルを先生と一緒に iPod に入力する⑧ 繰り返す <p>*****</p> <p>《教師と児童のインタラクティブセッション》</p> <p>Student: Tell me, Ms. ~~~! What is this?</p> <p>Teacher: It is ~~~. Repeat after me. ~~~ (発音を確認)</p> <p>Teacher: OK!</p> <p>Student: Tell me spelling!</p> <p>Teacher: ~,~,~,~,~ (スペルを確認) OK!</p> <p>Student: Thank you!</p>

先行研究で述べた外国語活動における ICT を利用した文字の指導は、まだ全国的に浸透していないかもしれない。だが、小学校外国語活動を発展させるための補助的手段として、今後さらなる導入が期待される。特に教科化へ英語教育が発達する中、伊東（2013）、山本（2014）の提言するような指導法はますます注目を浴びる傾向があると考えられる。

筆者は先行研究や実験研究を通じて、小学校外国語活動における文字の指導の重要性を認識しているが、本稿においては、今後の研究の基礎とするため、訪問校の授業観察記録に基づき、外国語活動展開事例を検討する。

3. 授業観察報告

授業観察のため訪れたのは、研究開発校に指定されていない枚方市の一般的な小学校2校と、すでに約10年前から特区の指定を受けていた寝屋川市の英語教育事業、英語村であった。

3.1 小学校授業観察

訪問したのは枚方市の A 校に 6 回、B 校に 2 回であった。A 校は 1 学年 3 クラスで構成され、1 クラスの人数は 30 名程度であった。B 校は 2 クラス、20 名程度という小規模な学校であった。B 校の方が落ち着いた校風であった。しかし、A 校の方が英語教室の設置や近隣の中学校に勤務しているネイティブ英語講師（Native English Teacher、以下 NET）の指導の機会に恵まれていた。そのため、外国語活動に対する取り組みは全体的に A 校の方が活発であるような印象を受けた。

訪問校の授業は通常、英語指導専門の日本人教師（Japanese English Teacher、以下 JET）とクラス担任（Homeroom Teacher、以下 HRT）というチーム・ティーチングによって行われていた。A 校では英語教室に JET が待機し、HRT が児童を連れて入室するところから授業は始まった。A 校における授業の流れ、及び担当者の役割については、資料 1、資料 2 にて示す通りである。

（資料 1）A 校の授業の流れ（5 年生）JET と HRT の役割

学習活動	ねらい
JET が入室してきた児童に英語で挨拶（Hello）をする。	教室を活性化し、児童の緊張をほぐす。
電子黒板とパワーポイントを利用して、英語の歌を歌わせる。	単語の音を確認させる。 カタカナ英語と英語の音の違いに気付かせる。
自己紹介ビンゴをさせる。 自己紹介サンプル、ビンゴゲームの用紙を配布する。 （発表者の好きなものを聞く。他の児童はそれが自分のビンゴシートにあれば、色鉛筆で塗る。ビンゴを完成させていく）	自己紹介の仕方を理解させる。 わかりやすく発表することを学習させる。 Hello, My name is Taro. (My name is …) I like bananas. (I like …) Thank you.
学習内容を振り返る。 振り返りシートを配布する。	自分や他の児童の良い点に気付かせる。
全員で挨拶をする。	英語の挨拶の仕方（See you など）を練習させる。

(資料2) A校の授業の流れ(6年生) JET, NETとHRTの各々の役割

学習活動	ねらい
JETとNETが入室してきた児童に英語で挨拶(Hello)をする。	教室を活性化し、児童の緊張をほぐす。
自己紹介と数を提示し、発音させる。 (NETが数字を黒板に書く)	1967, 46 数を提示した後、口頭でのみ以下の文章を確認させる。 Q: How old is he? A: He is 46 years old. He was born in 1967. ニュージーランドの絵を見せて文化を学ばせる。 (rugby, meat pie, kiwi, crocket)
ピクショナリー ⁸⁾	
ペアとなってインタビューの練習 (JETとNETがデモンストレーションを行い、お手本を見せる)	Q: Excuse me, may I ask a question, please? A: Sure. Q: Where are you from? Is this your first visit to Japan? 修学旅行で広島に行く際に、実際にインタビューを行う予行演習をする。ペアワークをさせる。
学習内容を振り返る。 振り返りシートを配布する。	自分や他の児童の良い点に気づかせる。
挨拶をする。	英語の挨拶の仕方(See youなど)を発話させる。

< A校の授業所感 >

① JETとHRTの協同による指導

JETはなるべく英語を使って指導するよう心がけていた。特にJETは6年生に対して、あまり日本語を使わないようにしていた。全ての児童が英語を理解していたわけではなかった。しかし、その都度JETとHRTが日本語や冗談混じりの英語を使用し、場の雰囲気や和らげ、英語に親しみやすい環境を作っていた。特に英語が堪能というわけではないが、HRTは児童のことを把握している。そのためきめ細やかな指導で、児童へ外国語活動に取り組むよう促していた。

JETがグループ・ワークを導入する際に、HRTが児童の名前を一人ずつ呼び、手際よくグループ分けを行っていた。JETとHRTのチームワークが抜群で、授業の進め方も効率良く、無駄のない学習活動が行われていた。そのため、授業内容が充実し、児童が退屈せず熱中している様子が伝わってきた。JETとHRTの信頼関係が小学校外国語活動に大きく影響するのではないかと感じた。

山本・大和田(2001: 101)はJETとHRTのティーム・ティーチングの特長のひとつに「準備、授業後の評価、反省に十分な時間がかけられる」ということを指摘している。NETによる指導によって、児童が本物の英語のインプットを得ることができることは言うまでもない。しかし、NETの人材の確保や予算には限りがあり、打ち合わせの時間も不足しがちである。また、英語を専門としないHRTにとって、JETの存在は心強いものである。日本人のJETとHRTの授業分析や計画、立案により、お互いの信頼関係が高まる。従って、より「充実した授業づくり」が行えるのではないかと。

② NETとJET、HRTの役割分担について

観察した授業の中で、NETが訪問する日はJETとHRTは補助的な役割をしていた。NETとJETの英語におけるコミュニケーションを直接見ることで、児童はどのようにコミュニケーションをするべきかを自然に習得しているようであった。特にインタビューを通じて、児童はNETとJET間の会話だけではなく、ジェスチャーや表情を興味深く観察していた。中には、NETの話し方を真似る者もいた。

NETが数やHow old is he?と発音した後、すぐに発話できるよう導くには、普段児童と接しているHRTの存在は欠かせない。もちろん生きた英語のインプットを与えることができるNETの指導が望ましいに違いない。しかし、NETが安心して指導を行うためには、HRTとJETの適度な補助が必要となってくるであろう。

③ 授業の展開

教科書『Hi, Friends!』に基づいて毎回の授業内容が組み立てられていたが、主な流れは以下のようなものであった。

1. 電子黒板(英語学習教室専用)でパワーポイントを使用し、英語の歌を歌わせて、インプットを行った。
2. その日習得する教科の名前、職業、曜日などのフラッシュ・カードを黒板に貼り付け、Listen and Repeatという形で発話させた。JETが発音、児童がそれをまねて、声を出すというプロセスが活発に行われていた。中には発音をせず黙っている子もいたが、まだ英語そのものが目新しい児童にとっては、抵抗もなく自然に行っていたようである。
3. 授業の半ばから、グループ・ワークへと入っていく。レッスンの課題は毎回異なっていたが、進め方は大体が同じ方式であった。グループでビンゴゲームやTシャツのデザインを行っていた。45分しかない授業時間でこれだけのアクティビティをこなすのは、大変であり、いつも時間が足りない感じがしていたが、それだけに充実度は高く、児童が英語教室での活動に熱中している様子が伝わってきた。

次にB校の授業観察について述べる。B校は英語教室がないため、JETが教室に入室するところから始まる。また、NETの指導はなかった。同校、5年生、6年生の授業の流れは資料3、資料4の通りである。

(資料3) B校の授業の流れ(5年生) JETとHRTの役割

学習活動	ねらい
JETが入室し、児童に英語で挨拶(Good morning. How are you?)をする。 CDで英語の歌を指導する。 HRTがグループごとに前に児童を引率し、手拍子でダンスをさせている。	教室を活性化し、児童の緊張をほぐす。 英語の音とリズムに慣れ親しませる。
レストランでの注文のやりとりを学ばせる。	デモンストレーションをする。(Aは店員、Bは客) A: Hello. B: Hello. Welcome to …Restaurant. Here is the menu. What would you like…? A: I'd like… B: Certainly. Here you are. A: Thank you. B: Please enjoy your lunch.
学習内容を振り返る。 振り返りシートを配布する。	自分や他の児童の良い点に気づかせる。 次回学習する内容を予告する。
全員で挨拶をする。	英語の挨拶の仕方(Good bye. See you againなど)を練習させる。

(資料4) B校の授業の流れ(6年生) JETとHRTの役割

学習活動	ねらい
JETが入室してきた児童に英語で挨拶(Good morning. What day is it today?)をする。	教室を活性化し、児童の緊張をほぐす。
チャンツを唄わせる。(HRTが電子オルガンを弾いて、リズムをとらせた)	英語のリズムになじませる。
今まで学習した英語表現を使って、グループで短い発表をさせる。	レストラン、道案内など様々な表現の復習をさせる。
学習内容を振り返る。 振り返りシートを配布する。	自分や他の児童の良い点に気づかせる。 次回学習する内容を予告する。
挨拶をする。	英語の挨拶の仕方(See you againなど)を発話させる。

< B校の授業所感 >

① JET と HRT の協同による指導

B校の最も大きな特徴はHRTの役割がかなり大きかったことである。授業中の使用言語は日本語半分、英語半分程度であった。HRTができるだけ児童の活動を率先して、JETから英語のインプットを引き出していた。HRTは児童のお手本となり、児童の世話をする役割にとどまらなかった。どちらかと言えば、HRTが主体となって外国語活動を進めて行った。

A校のように英語教室も電子黒板もなかったが、各教室には電子オルガンが備え付けてあった。あるHRTは、Warm Upのチャンツを児童と歌う際にオルガンを弾き、スポーツホイッスルでリズムを取って率先して指導を行っていた。そして、JETは補助的な役割を担っていただけであった。

A校とB校を比べてみると、B校は打ち合わせにあまり時間を割いていなかった。しかし、特に問題もなく、JETとHRTがお互いの役割分担をしていた。英語を専門としないHRTであっても、外国語活動の指導に躊躇せず、積極的に児童のお手本となる役割を担えば、授業が問題なく進んでいくのかもしれない。

② グループ学習から協同学習へと

B校で最も目立った点は「協同的な学びを取り入れたグループ学習」である。佐藤（2006: 41）は協同学習とグループ学習の違いを以下のように述べている。

集団学習や班学習が、集団もしくは班のまとまりを重視するのに対して、協同的な学びにおいて学びの主体はあくまでも個人であり、グループ活動の中で決して一体化を求めず、むしろグループ内の個々の人の考えや意見の多様性を追求している。学びは同一性から生まれてこない。学びが成立するのは差異においてである。

さらに、江利川（2014: 277）は、「背伸びとジャンプ」の課題設定に関して、「個人では到達できないような高いレベルの課題を設定し、仲間と協同で達成する」と言及している。すなわちグループ内で相互理解を深め、より高いレベルの課題に取り組むことが重要と考えられよう。

B校では、協同学習の要素が自然に盛り込まれていた。学習活動の間、HRTやJETから余分な助言はほとんどなかった。特に「協同学習」を導入しているとHRTもJETも言及していなかった。にもかかわらず、4人1組のグループの児童が自主的に発表の練習や担当の活動に従事していた。この教育方法は小学校外国語活動の場だけではなく、あらゆる教育現場においてこれから活用していくことが可能ではないかと考えられる。

③授業について

同じ市内であるため、授業の流れに関しては、概ね A 校と B 校は似ていた。教科書『Hi, Friends!』に基づいて毎回の授業内容が組み立てられていた。B 校では NET の指導や英語教室、ICT の活用が見られなかった。にもかかわらず、児童と HRT による協同学習が成立していたため、外国語活動の中で行われる学習活動の難易度は高く、クラス全体が一体となって取り組んでいた。

文字の指導に関しては、A 校と B 校の取り入れ方は異なっていた。A 校の JET は文字の指導に積極的であり、パワーポイントの中に文字を入れて単語を提示し、その音を児童に気づかせようとしていた。また時には簡単な単語を書かせる練習も行っていた。しかし、B 校の JET は文字の指導は児童の負担になるという姿勢を示し、歌やゲームを中心とし、まずは英語の音やリズムに慣れさせるよう工夫をこらしていた。このように同じ市内の小学校においても全く違う指導法を行なっていることは驚きであった。今後訪問校の数を増やし、さらに調査を続けていく必要があると考えられる。

3.2 英語村

次に全国的に研究開発校として、文部科学省より指定され、英語教育に力を入れてきた寝屋川市の事業である英語村について紹介する。寝屋川市教育研修センターの英語村へ2014年10月に訪問した。英語村は、寝屋川市の教育委員会の英語教育事業の一環として平成26年度より開始された。英語村というだけあり、児童の学習活動は全て英語で行われている。

当日センターには寝屋川市に雇用されている6人のNETと一般のボランティア、及び職員が児童をサポートした。朝9時30分から14時30分まで市内の小学校5年生約80名が参加した。残念ながら、直接小学校の教師や児童から話を伺うことは許可されなかったため、観察した実践内容についてのみ以下にまとめておく。

英語村の実践内容の特徴として、5年生の児童が自分達で英語のパワーポイントを作成し、“Turn right. Go straight .What is that? This is the music room.”など使える範囲内の語句を用いて、英語でプレゼンテーションを行っていた。これは発表した児童の小学校では、すでに日頃から英語で自己表現活動を行っているためであろう。

根岸・根岸(2005: 40)は教師側の自己表現の利点について、「生徒に表現する楽しさを教えられ、学ぶ意欲を高めることができる」と述べている。寝屋川市の児童のように、学校の写真を貼りつけ、文字を挿入し、ICTを利用して発表するのは高度な内容であろうと考えられる。しかし、すでに10年も前から英語学習に取り組んでいるため、さらに難易度の高い技能を自己表現活動によって、実践することも可能ではなからうか。

一方で、NETの話からは「児童には単なる英会話や歌、ゲームを指導することで十分であ

る」という姿勢が見受けられた。英語が教科化される以前に十分な英語力を習得している小学校のNETが、文字の扱いに積極的でないと残念である。一概に全てのNETの考え方が同じであるとは言えない。しかし、HRT、JET、NETによる指導法への取り組み方には統一が必要であると感じられた。なお、英語村における学習のスケジュールと関係者の役割については資料5に示す通りである。

(資料5) 英語村のスケジュール(5年生) NETとボランティアの役割

学習活動	ねらい
Warm Up、全員で英語の歌を歌う。 (パワーポイントを利用する) NETが示した振り付けを練習して、歌を歌う。	活動中に児童にとって大切な言葉をNETが確認する。 (トイレに行きたい。体調が悪いなど) Excuse me. Can I go to the bathroom? I feel sick.
グループに分かれて、名札作り。アルファベットカードの切り抜きをNETからもらい、名札に貼る。	NETと英語でやり取りをしながら、名札を作る。 Akiko: A, please. (児童の名前はAkiko.アルファベットのAをもらう) NET: Here you are. Akiko: Thank you.
学校紹介のパワーポイントを児童が英語で発表する。	小学校の外国語活動の授業で学習したことを英語村で発表する。
NETの自己紹介、国の話を聞く。NETはフラッシュ・カードでゲームをする。	それぞれの国の文化を学ぶ。 NETと交流をする。
振り返りのアンケートを配布する。	
挨拶をする。	英語の挨拶の仕方(See you againなど)を発話させる。

<英語村の外国語活動所感>

① NETと児童のコミュニケーション

NETと児童のコミュニケーションは、全て英語で行われていた。学習活動の間も日本語で騒ぐ児童はほとんど見当たらなかった。ごく普通にNETの英語を聴いている児童の態度には驚いた。名札作りの時には、児童は躊躇せず、NETのところに自分のイニシャルのアルファベットの切り抜きをもらいに行き、コミュニケーションを行っていたようであった。

また、ビンゴゲームの際には、色が揃うと、自発的に英語で“Bingo!”と発話し、NETがいる場所へ向かった。英語の外国語活動が児童とNETの間で日本語を介さず進行しているのは、新鮮に感じた。

しかし、中にはNETの話す内容を理解できず困っている児童もいた。それが児童の英語嫌いを生むのではないかと思ったが、意外にも不安な様子を見せず活動を続けていた。そのような場合、周りの児童が次に行う学習活動を日本語で説明したり、本人が他の児童に確認したりしていたのである。普段から英語に接しているため、問題解決能力が備わり、お互いに助け合っていた。そして、自主的にNETの表情、ゲームの進行具合、周りの状況に対処していた。

ボランティアがサポートしていたのも大きな一因であろう。NETが全ての児童に目が行き届くわけではない。また自分で学習活動をこなしていけない児童も存在する。英語が苦手な児童にはNETが指導の中心である場合、ティーム・ティーチング（NETとHRTとJET）、あるいはNETとボランティアなどが教室内に存在していることが望ましい。しかしそれ以前に教室内に助け合うという「学び合いの精神」が確立していることは素晴らしいと感じた。

②成功の要因について

今回の児童は、英語で学習活動することが当たり前であり、その活動の中には協同学習の要素も十分に取り入れられていた。引率のHRTは全く介入せず、写真を撮影したり、センターを巡回したりしていただけであった。寝屋川市の小学校は授業観察に行った訪問校とは異なり、男性のベテラン教諭がHRTであった。HRTが経験豊富で指導力が高いことも要因のひとつであるのかもしれない。また学外における外国語活動の実施には、地域全体のサポートが欠かせないであろう。

③英語村の設備の充実

英語村の施設は非常に充実していた。研修センターの本館と新館の1F、2Fを利用して、英語の飾り付けが施してあった。写真やアルファベット、フォニックスのポスター、ゲームなどが置いてあり、児童の目を引くものばかりであった。また、各部屋にはICT機材が備え付けてあり、パワーポイントの利用が可能となっていた。日本でもこのように英語づけの環境をつくり上げる恵まれた施設が用意できたからこそ、英語村は成功しているのであろう。英語村の準備に対する職員の方々の熱意ある取り組みには感心した。

また、英語村は小学生だけではなく、中学生にも利用されている。その活動内容は小学生とは異なる。具体的にはNETによる英検3級と準2級の面接の機会や、「イングリッシュ・プレゼンテーションコンテスト」に向けての練習などである。このような非常に高度な英語の技能習得に挑戦させるのは、これまでの英語村の取り組みの成果であると感じた。

4. 今後の課題

今回、小学校外国語活動の研究の調査のために小学校2校と英語村を訪問した。この調査を通して、新たな発見となった内容を以下に言及する。

① Warm Up の助長

観察した2校及び英語村も Warm Up の外国語活動に重点を置いていた。協同学習を英語教育に取り入れることを支持している根岸(2010: 15-21)は、Warm Up にヴァリエーションを持たせることを勧めている。Warm Up の条件として、①授業を盛り上げ、②楽しく、③英語力を高めると述べている。具体的には、ビンゴゲームや歌などをあげている。観察した外国語活動の Warm Up においては、音楽を流し、パワーポイントの映像を見せたりして、歌やチャントを歌わせていた。また時には、振り付けをさせたりもしていた。今後教科化の際に、「遊び」の要素を含んだ現在の Warm Up 形式の扱いが課題となってくる。文字を扱い、そのまま授業に展開させられる「総合英語」の要素に似た Warm Up が必要となるのではないか。例えば、英語の歌の中に英単語や文字を提示することなどが考えられよう。

②協同学習の勧め：教師の役割

B校や寝屋川市の児童のように、教師が手助けを必要以上にしなくても学生が学び合い、難易度の高い課題に取り組んでいく授業づくりが必要ではないかと実感した。教師はあくまでも学生同士を「つなぐ」役割に留まるべきである。教師の役割を佐藤(2006: 41)は「つなぐ」であると指摘している。

グループ活動の中で「先生、先生」と、仲間に問いかける前に教師に質問する子どもがいる。そういう場面では、その子の質問に直接答えるのではなく、「隣の人にきいてごらん」とグループ内の子供と子供をつなぐ働きかけをする必要がある

今回改めて英語村にいる児童を観察し、学び合いの精神を教師が育てていかなければならないと感じた。そして、グループの中でうまくコミュニケーションが取れない児童が存在した場合、教師は「つなぐ」役割を果たすべきではないかと感じた。

③振り返りシートを参考にして

小学校外国語活動では、毎回「振り返りシート」が活用されていた。毎時間の学習活動について、自己評価をしていたのである。江利川(2014: 278)は毎回の活動後個人とグループで振り返ることの意義について、「今後の課題、分担、解決法などを話し合うことで、目標・

課題を共有化する」と提案している。これにより、教師は児童と共に学習活動を分かち合い、さらに綿密な授業づくりが可能となるであろう。

また年齢が上がるにつれて、対人面の不安や精神的な問題が学習意欲に影響することは、避けられない。無邪気な小学生は率直に反応するため、学習が退屈ならばすぐに集中しなくなる。また何か不満があれば、すぐに態度に表れる。そのためにも、振り返りシートなどを参考にし、児童の学習意欲や精神面の問題を考慮しなければならない。

5. おわりに

日本の早期英語教育は、今後低年齢化、教科化が進み、ますます盛んになると考えられる。この変化が日本人の英語力の底上げとなり、英語教育現場が改善されていくことを期待したい。本稿は授業観察をし、概要をまとめた単なる予備調査にすぎない。しかし、本稿の事例研究を手がかりとし、「この教育現場では何が起きているのか」という視点から、今後小学校訪問を続け、文字の指導について実証的な研究を続けていきたいと考えている。

*本研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究C）課題番号 24520715の助成を受けたものである。

注

- 1) 文部科学省 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語改革の五つの提言～」2. 必要な改革について 1. 国が示す教育目標・内容の改善についてより採取。
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
- 2) 平成24年度から26年度科学研究費補助金（学術研究助成基金）基盤研究（C）課題番号 24520715研究課題「小学校英語活動におけるICTを利用した国際交流プログラムの構築」研究代表者 新潟経営大学 山本淳子教授の研究分担者として、現在も研究活動を行っている。
- 3) 枚方市の小学校2校、寝屋川市教育研修センターを訪問した。
- 4) 文部科学省 新学習指導要領・生きる力 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm
第4章 外国語活動 第3 指導計画の作成と内容の取扱い
2. 第2の内容の取扱い (1) イにおいて、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」と明記されている。

- 5) (アレン玉井、2010)によれば、リタラシー能力とは従来の「読み・書き」能力のことである。
- 6) 注2) 参照。
- 7) テキストマイニングとは、自由記述用統計ソフトウェアを用いたIBM SPSS Text Analyticsによる分析手法のことである。
- 8) ピクショナリーとは、4人グループのうちの1人が、NETの見せたカードの絵を黒板に描き、他の児童がそれをあてる、イラストゲームのことである。

参考文献

- 1) アレン玉井光江、『小学校英語の教育法』、大修館書店、2010年。
- 2) 佐藤学、『学校の挑戦』、小学館、2006年。
- 3) 根岸恒雄・根岸真純、『世界が見える英語楽習』、三友社出版、2005年。
- 4) 根岸恒雄、『楽しく英語力を高める“あの手この手”』、三友社出版、2010年。
- 5) 文部科学省、『小学校指導要領解説外国語活動編』、東京：東洋館出版社、2008年。
- 6) 文部科学省、『Hi, friends! 1』『Hi, friends! 2』、東京書籍、2012年。
- 7) 伊東治己、「外国語活動における文字の扱い再考—文字を使つての指導と文字指導を区別しよう—」、『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』4号、2013年、27-38頁。
- 8) 江利川春雄、「英語学力と人間関係力を高める学び合いの協同学習」、『中部地区英語教育学会』43号、2014年、275-280頁。
- 9) 松田浩二、「中学校との円滑な接続を図る小学校外国語活動の展開—望ましい文字指導の在り方—」、『福井県教育研究所研究紀要』18号、2013年、66-74頁。
- 10) 山本淳子・大和田眞知子、「実践報告と提言 日本英語教師 (JET) とクラス担任 (HRT) による Team Teaching (TT) が小学校英語教育に果たす役割」、『日本児童英語教育学会研究紀要』20号、2001年、91-100頁。
- 11) 山本淳子、「小学校英語活動における文字指導の実践—自由記述から見た小学生の意識」、*Media, English and Communication*, No. 4、2014年、141-160頁。

(なかがわ・ひろよ 短期大学部准教授)